

## 資料編 4. ヒアリング調査結果サンプル 1

### 富山市ファミリーパーク

### 『富山大学教育学部教育教員養成過程学生実習』

ヒアリング実施日 2001. 2. 21

#### プログラム概要

幼児教育に関する授業科目のうち、保育内容に関する科目である「子どもと環境とのかかわり」を受講する学生に対する実習。富山大学との連携で年1回、定期的を実施。

期間・・・週1回ずつ3日間 11:00～14:30(うち1時間は昼休み)

参加人数・・・20～30人

参加方法・・・事前申し込み

実施者人数・・・教育担当係員4名、飼育係員3名

#### プログラム進行

**1日目** ……オリエンテーション、実習1

##### ■オリエンテーション(11:00～11:20)

レクチャーホールで実施。自己紹介、日程・実習内容の説明。

##### ■実習1「見えない環境Ⅰ・マイクロな自然」

園内の4カ所(正面入口付近の植え込み、とんぼの沢畦、芝生広場、ひみつの森林床)で、表土から深さ5cmほど、重さ1kgの土壌を採取。ホールで、その土塊に含まれる生物種を同定、レポートする。(p hあり)

全員で園内を巡回、植生や動物の分布等環境特性についてのガイドをしつつ、各ポイントで土を採取。班別に採取場所を担当、ひとりにつきスコップ一杯ほどの表土と植物をともに採取。採取完了後、ホールに戻り昼食。午後、表土に含まれる植物や小動物の同定作業をし、同定できたものを発表、環境の違いとそこに住む生き物の違いを検証する。



## 2日目 ……実習2

### ■実習2「見えない環境Ⅱ・ファミリーパーク音源調査」

園内4カ所（水禽池、とんぼの沢、芝生広場、ひみつの森）で5分間、ラジカセで自然の音だけを録音、音源を地図に定位する。全員で園路を巡回、班別に録音場所を担当。午後、ホールで、何の音がどこから聞こえてくるかを同定、各ポイントでの音環境をレポート。非生物環境と生物環境、およびそれらのダイナミックな系について環境分野のまとめを行い、環境の違いと、そこに生きる生物との関連をとらえる。

## 3日目 ……実習3(11:00~12:00)、実習4(13:00~14:00)

### ■実習3「身近な野生動物」

園内で採取あるいは園内に生息している身近な野生生物（カナヘビ、カエル、ミミズ、昆虫、クサガメ、ドジョウ、サワガニ等）を観察・触察することによって、人間で近い環境で生きている野生生物の生態を知り、かつ接し方を考える。子ども動物園で概要説明の後、自由触察実習を行い、その後、解説をして指導者つきの触察実習。手洗いの後、ホールに移動して、実習前と後についての質問用紙に書き込むことで自分なりのまとめをする。

実習前に関する書き込み事項・・・見たことのある動物、触ったことのある動物、それぞれの動物に対するイメージ。

実習後に関する書き込み事項・・・自由観察で触れた動物、指導観察で触れた動物、触れた理由、触れなかった理由。

### ■実習4「動物飼育体験」

教育現場で飼育されることの多いウサギの飼育体験。2人に1ケージ（1頭）のウサギを渡し、飼育職員の指導のもと、取り扱いや掃除、給餌についての技術を体験。子ども動物園で実施。実習とともに観察記録のワークシートを作成。項目は、品種、個体番号、生年月日、体重、耳長、後趾長、尾長、健康状態（耳の汚



れ、鼻水の有無、歯の伸び、毛の状態や肥満度、爪の伸び、傷の有無、心音)、残餌量計測による1日の採食量の割り出し、1日の飲水量の割り出し、糞の状態(色、形、臭い、数量)、尿の状態(色、臭い、量)。さらにウサギの世話に関する解説(繁殖、病気、雌雄判別等)。手洗い後、ホールに移動して終了。

## ポイント

**身近な自然を利用する方法の種をまくのが目的** 知識を植えつけるのではなく、自己と自然環境との関わりを認識することで視野を広げ、教員として現場に出たときに必要なインタープリターとしての認識を体感してもらうことを目的とする。たとえば土壌生物の同定自体より、生物の環境における多様性に気づき、目を向ける姿勢を開発することを重視。土や音を利用することは保育園にも学校にもあるという意味で、自分の体験を、子どもに何かを与えるときの方法や手段の手がかりにすることができる。やり方の種をまくことを目的として実施。教育効果は非常に高い。

**効果の事後追跡が可能** 実習なので事後にレポートの作成があり、効果等の確認や追跡が容易。実施内容を検討し、次回に反映することができる。

**連携方法がネック** 大学との連携は、当園の場合、外部のグループ内に富山大学教育学部長がいたという人的つながりが発端。新たな実施を考える場合、大学との連携をどういう方法で開始するかがネック。

**総合学習への対応も可能** 教員養成過程の学生すべてに実施可能で、関連の大学への周知や連携がとれれば広く実施することもできるが、当園の現状の人員体制では他の活動との調整が困難で、現在のところ富山大学のみに対応となっている。だが、このプログラムは小中学校に取り入れられる総合学習にも十分に応用できる。今後、ニーズが増加すると思われ、広げやすい状況にあると考えられる。

**園内にあるものが材料** 下調査に時間がかかり、目の行き届く指導のために実施人数も多いが(1人が指導、3人が補助) 人的負担を別にすれば、園内に存在するもので全て対応が可能である。また、アイデア次第で、さまざまなプログラムが開発でき、切り口は無数にあると考えられる。動物に限らず動物園のスペース自体を教材に使うという発想は斬新で新しい視点といってよい。ただし、そのアイデアの出せる人材の存在が大きな条件。かつ、プログラムのバリエーションを広げるには、さまざまな分野における知識を持つ人材の存在も必要。

ちなみに、当該園では毎年、プログラムの内容を新たに作成している。過去に実施されたバリエーションには以下のようなものがある。

- ・「宝物さがし」 . . . 園内を抽象的な 10 項目（きれいなもの、白いもの、気になったもの等）を探しながら歩き、五感全体を使う。
- ・「住人ウオッチング」 . . . 事前にしかけておいた捕獲罠（シャーマントラップ等）を点検する。
- ・「食べ物さがし」 . . . 小動物について、その動物のエサとして与えるものを園内の野生のものから 3 種類と用意した動物園のエサから 3 種類、選んで給餌観察する。
- ・「除草」 . . . 草刈りを行い、2 週間後の変化を観察。
- ・「でんでん虫を飼う」 . . . 1人1個体のでんでん虫を渡し、1週間飼育して観察。

## **工夫と発展**

**アウトソーシング** アイディアおよび多岐にわたる分野における人材がない場合、コーディネートを外注することを考えるのも方法。インタープリターや子ども対象の活動をするナチュラリストへの依頼等が可能だと考えられる。

**応用範囲の拡大** このプログラムは、すでに現場にいる教員の研修、学芸員実習、中・高生の校外授業としても対応が可能。学校サイドとの連携方法としては、ガイド等における学校関係者とのつきあいや他グループでの出会いをきっかけにして発展させるのが現在のところ確実な方法のようである。開始以降は教員の異動等に伴う口コミ効果が期待できるが、人員体制によって対応できる学校数が制限される点が今後の課題だと考えられる。

**学校との連携** 当該園では、プログラム作成に関して大学側は園におまかせの状況。指導要領との整合性のためにも、実習内容についても学校サイドとの連携がとれれば、さらなる発展が期待できるであろう。